

大博物館だいの

No. **63**

2009.10

津山郷土博物館



津山市制施行80周年記念特別展 津山郷土博物館

古い津山の写真展

平成21年10月10日(土)～11月23日(月) — 津山城下町、お城の松に。

今年は、津山市制施行80周年の年にあたり、市でもさまざまな企画がなされています。津山郷土博物館では、これを記念して特別展「古い津山の写真展」を開催します。写真は約40点、江見写真館所蔵のものを中心に、その他、市民の方から提供されたものも加えて、展示する予定です。併せて、昭和時代の懐かしい日常生活用品を若干数、展示する予定にしています。

また、懐かしい津山の風景をふんだんに載せた図録の写真集も併せて刊行しますので、ぜひお楽しみにご来館いただきますよう、ご案内申し上げます。

夏休み 体験教室

恒例の夏休み体験教室が、7月24日を皮切りに始まりました。「弥生土器をつくろう」「トンボ玉をつくろう」「勾玉をつくろう」の三つの教室は参加者数が230名にもなりました。

また、8月7日から14日まで、3名の大学生が博物館実習に訪れました。博物館資料の取り扱いや補修・特別展準備、そして、夏休み体験教室の手伝い等…。短期間の実習でしたが、学芸員をめざす彼らに、何かを掴んでもらえたと確信しています。

次に、子ども達の感想文の一部と、実習を終えた大学生の感想文を紹介します。

弥生土器をつくろう

- 土器を作るのはすごく楽しくて、1つ目は丸い形の土器を作っていたけど、3つ目、4つ目を作ると、ハートの形などおもしろい形を作ってみて、こういう形もおもしろいなあと思いながら作りました。思ったより、かん単に作れたし、形も好きなように作れたので、本当に楽しかったです。むずかしい所を、先生が助けてくれたので、とてもうれしかったです。けっこういい作品になったと思います。土器は初めて作ってみて、すごく楽しくていい思い出になりました。出来た土器は、夏休みの作品に出したいと思います。残った土器は、家にかざりたいと思います。本当に楽しかったです。

(林田小6年 本田夏和さん)

- 弥生時代の土器作りで一番むずかしかったことは、土器の形を整えることでした。整えていると、表面のでこぼこの部分が、少しずつ平らになってきて、だんだんきれいになってきてうれしかったです。焼いていると初めは土器が真っ黒になっていました。それは先生が言うには、木の燃えたすすがついているそうです。でも最後にはもっと高い温度にするので、すすが燃えて前の土の色にもどっていました。今回の弥生土器作りは、とってもとっても楽しかったです。

(西小6年 廣澤成耶君)

- 弥生土器は弥生時代の土器ということは知っていたけれど、作り方やどんな名前(つぼとかのこと)でどんな形だとかは正直よく分かりませんでした。作り方は最初、ねんどをかたくしたような物を丸くしてつぶします。それが「底」です。次にまたねんどをかたくしたような物を出し、手で細長くし、くるとまきます。つなぎ目を消しながら、くり返していくと形は完成です。そして、焼きます。私は焼いているのを見て、ずっと昔に弥生土器を使って楽しそうに笑っている家族のすがたが思いうかびました。当時の人はみんな苦勞をして、私たちのような子どもまでも苦勞しているのに、私はとてもめぐまれています。苦勞している人への気持ち大切に、土器を大切にしたいです。

(高田小5年 松浦果凜さん)

トンボ玉をつくろう

- 初めて来て、作り方など知らなかったけどやってみてとても楽しかった。くるくる回しながら、ガラスぼうをとかしてつくり、その上にまたガラスをとかし、もようをつけたのが少しむずかしかった。でも、できたらすごくうれしかった。また、き会があったら、トンボ玉をつくりたいと思った。

(高野小6年 小寺 涼君)

- バーナーが最初はこわかったけど、だんだん慣れてきたら、おもしろかったです。それに、いろいろな色のガラスのぼうがあったので、何種類かを組み合わせてみたり、ひとつの色にもようをつけたりして、いろいろなトンボ玉を作って楽しかったです。

(林田小5年 小林留奈さん)

- とんぼ玉って最初とんぼの形と思ったけど、首かざりのような物だとわかってびっくりした。火を使うから熱かったけど、いいのが作れてよかった。

(東小5年 三村海都君)

- 初めてのたいけんで、ちょっとこわかったけど、やってみて楽しかったです。いろいろなガラスのぼうでやってみて、われたのもあったけど、もようをつけたのが一番きれいでした。手にあせがでて、すべりそうになったけど、先生が手伝ってくれたので、ちゃんとできました。3個しかできなかつたけど、どれもきれいな色で、ちゃんとした形になったのでうれしかったです。またやってみたいです。(加茂小5年 山中玲愛さん)



勾玉づくり

= 博物館実習感想文 =

実習を終了して

《立命館大学文学部日本史学専攻 須江亮太》

私は八月七日から十四日まで、休館日を除いて七日間、津山郷土博物館において実習をさせて頂きました。学芸員の仕事、博物館の仕事という、「資料と関わる」ということが想像されますが、この七日間の実習において、その関わりも多様であり、またその他すべきこともあることを知ることができました。

まず一つは資料の扱い方についてです。展示されているものはもちろん、収蔵されているものも含め、学芸員としての資料への気持ちを感じられます。それは「いかに丁寧に扱い、保存するか」に基づくものであり、学芸員の仕事はそれを軸にして展開しているという印象を受けました。

次に資料の研究・考察について、これも学芸員の仕事のひとつで、津山郷土博物館においては、町奉行日記の刊行、様々な講演、教室の開催、そして博物館における特別展示など、日々勉強する、そして伝えるという印象を受けました。また、事務室で学芸員の方々が、博物館の展示などについて電話で応対し、質問に答えている姿や、実際に外部の方が資料を閲覧するために博物館へやってきた際に、対応する姿を見ても学芸員の在り方を感じます。

そして、地域の中の博物館として、人々の交流もまた重要であると感じました。実習中には博物館において、勾玉作り、土器作りといった体験教室が開催されました。その際に私も補助という形で参加させて頂き、地域の方々と交流することができました。そこでものを作ることは、間接的であっても、歴史に触れる貴重な機会となると考えています。また、自分の作ったものを満足気に持ち帰る方々を見ると、補助という形であっても、私自身、やりがいを感じました。人との関わりは自分自身を刺激し、変え、客観性を持たせてくれる方法であると再確認することもできました。

この七日間の実習の中で、学芸員の仕事として考えていた内容を、良い意味で裏切る様々な体験をさせて頂いたと感じています。もちろん学芸員の在り方、資料の扱い方も学ぶことができ、また将来またすることがあるのだろうかと思うことも多々ありました。実習生として学び、また博物館への貢献ができていたならば幸いです。

実習を終えて

《岡山商科大学経済学部経済学科 畑 秀明》

7日間という短い実習期間を終え、大変内容も濃く充実した日々を経験させて頂き、ありがとうございました。

実習が始まる前はとても不安だったが、終わってみると、一日一日が新鮮で、本当に充実した毎日だった。

初日の勾玉づくりの指導から始まり、2日目の館内説明では、何度か見学していたが、初めて展示品の重要性が認識でき、3日目の特別展準備では、キャプションの交換で指摘されたパネルの切り口から、どうしたら見栄えがよくなるかなど、見学者の視点に気

を配らなければならないことを学んだ。4日目は初めて体験した子ども達の指導、5日目の土器の野焼き体験、6日目の巻き物の取り扱い。そして、最終日の資料の補修など、いろいろな実習を通して貴重な体験をさせて頂いた。

実習では、博物館の収蔵品などを実際に扱いながら、学芸員の方と一緒に作業させて頂く中では、博物館の果たす役割や、公共施設としての博物館の運営などについて教えてもらい、普段の大学での授業では、経験することができない様々なことを学べた。また、学芸員の仕事は、資料を大切に扱うことに細心の注意が必要で、本当に体力と精神力がいる仕事だと実感し、何より職務の幅が広いと考えさせられた。しかし、毎日いきいきと仕事をしている職員の方々の姿を見て、学芸員という仕事は、大変やりがいがあり、夢を持った幸せな仕事だと思った。そして、同じ目標を持った実習生の3人で一緒に新しい知識を学んだり、協力して教室を成功させることができ、実りの多い実習になった。

博物館実習所感

《東京学芸大学教育学部文化財科学専攻 下山真平》

今夏、津山郷土博物館において、御用繁多にもかかわらず7日間の実務実習の機会を与えて頂き、学芸員の職務の多様さについて身をもって学ぶことができたと共に、博物館という施設が市民の方々の生涯学習や研究活動に寄与するための場であるということを実感することができました。

今回の実習では、勾玉つくりや夏休み子供歴史教室の土器焼成などの教育普及活動の他、資料の取り扱い、保存・修復、収蔵、キャプションの製作など、多岐に渡る仕事を体験させて頂き、学芸員が担う職務の多さに閉口し、その大変さを再三痛感しました。

教育普及活動の補助を行った際には、子どもたちが真剣な表情で勾玉つくりや土器焼成に取り組む姿勢が大変印象的でした。なかには、以前にも参加経験のある子も少なからず居り、津山郷土博物館が、一過性の利用に止まらず、中長期的な活用の対象となった、地域に根ざした博物館であるということを認識させられました。また、資料の取り扱いや修復、収蔵では、実際に数々の文化財に触れながらその方法を学ぶという稀有な機会を設けて下さり、非常に充実した貴重な経験となりました。

これまで私は来館者としての立場でしか博物館を訪れたことが無く、また、博物館の理念や学芸員職についても机上の学習が主だったため、実習開始当初は指示されたことをこなすことで精一杯でした。しかし、このような状態だった私が無事、実習期間を終えることができたのは、館長をはじめ学芸員の皆様が温かく迎えて下さったことに加え、丁寧なご指導、ご鞭撻を戴いたためであると感謝しています。津山郷土博物館で得た知識と経験を糧に今後、更に博物館に対する知見を深いものにしていきたいと思えます。



甲冑の収蔵作業



土器焼き風景

地図に見る 美作地域鉄道敷設の変遷

尾島 治

はじめに

美作地域の近代化の象徴でもあった鉄道網の整備は、津山と各地を結ぶ複数の路線の組み合わせとして進められた。それは、ひとつには、江戸時代の津山城下町が、四方に伸びる交通の要衝であったことに由来している。そして、岡山県内を南北に縦断する鉄道敷設の大きな目的は、山陰と山陽を結ぶ「陰陽連絡」であった。その際に、様々な路線選定の議論が成される中で津山を経由することとなったのには、もうひとつの要因として、山陰と山陽を結ぶ交通網の整備を望む地元住民の熱意があった。

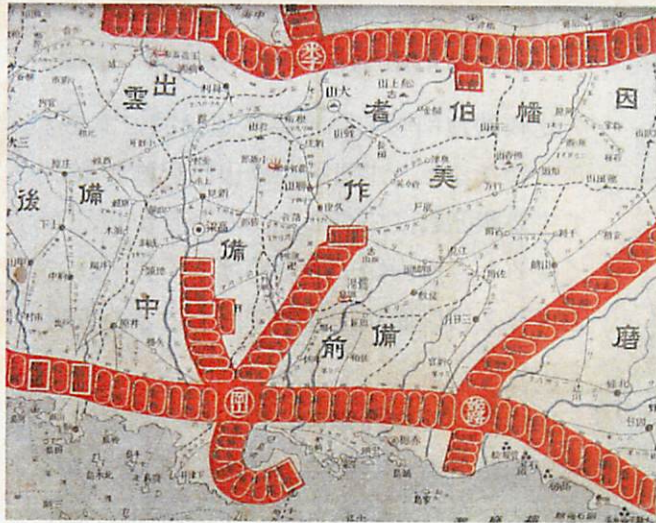
この鉄道網の整備の過程は『津山市史』第6巻、第7巻などで明らかにされているが、文章で読むだけでは中々分かりづらいものである。そうした中、長い年月を経て整備されていく過程を分かりやすく、如実に示してくれるのが、年を追って作製された地図である。殊に鉄道地図は、鉄道路線を表現することに特化しているため、鉄道網の変遷を知る資料としては非常に価値が高い。

ここでは、館蔵の地図類の中から、主に鉄道地図を用いて、敷設年月日等については『津山市史』の記述を参照しながら、津山を中心とする鉄道網の完成までの変化を視覚的に紹介したい。



◆「岡山県三国全図」(明治20年11月25日、牧一雄家資料、地図-1、当館蔵)

これは、岡山県内全域の美作・備前・備中を描いた地図である。旧村を基本とする行政区画と共に、大まかな地形と道路網、官公庁が記載されている。津山からは、江戸時代以来の道路網を拡張整備する形で、四方に伸びる道路整備が進められている様子が分かるが、いまだ鉄道に関しては、その影も形もない。後に中国鉄道の一部として開設される岡山-津山間の路線も、具体的な動きとしては、明治22年頃から計画されたものであった。



◆ 「鉄道旅行地図」

(明治45年5月20日、移管資料20090708-51、当館蔵)

東京から始まった鉄道網の整備が全国に広がっていくと、利用者のために全国規模の鉄道地図が作製されるようになった。鉄道地図では、地形図のような正確な縮尺は無視され、デフォルメされた日本地図上に鉄道路線が太く描かれている。

この当時、津山（現津山口）－岡山間では、明治31年12月21日に私鉄中国鉄道が既に開通している。中国鉄道は、岡山－津山－勝山－米子という路線で「陰陽連絡」を計画したものであ

た。しかし、その後の状況の変化から、津山－勝山－米子の路線は、中国鉄道の路線としては実現しなかった（『中国鉄道』『岡山県大百科事典』山陽新聞社）。

この地図の中では、岡山から美作国津山に向かって伸びる路線が、中国鉄道線である。また、この地図では、鉄道の経営母体による区別をしていない。この中国鉄道以外で後に津山に接続する路線は、全て国有鉄道として敷設されている。ちなみに、この中国鉄道は、戦時中の昭和19年に国有化されることになる。

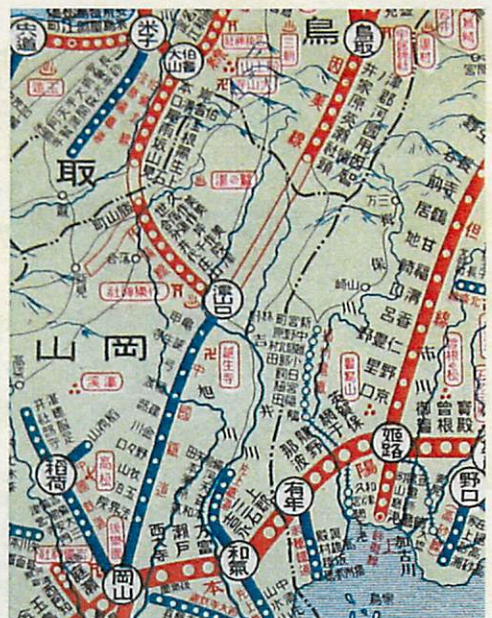
◆ 「全国鉄道地図」 (大正14年3月1日、移管資料20090708-16、当館蔵)

大正14年のこの地図になると、鉄道路線は大きく変化している。津山から西に向けては作備線の敷設が進み、大正12年8月21日には津山－美作追分間と、中国鉄道線との連絡のための津山－津山口（旧津山）間が開通した。その後、大正13年5月1日には久世駅、大正14年3月15日には中国勝山駅まで路線が延長された。この時には現在の津山駅が開設されているが、この地図では、津山口駅が主要な駅のように描かれている。これは、津山口から中国勝山までが作備線の路線だからである。

さて、この地図の段階では、中国勝山までが開業しているが、その先については、北に向かって白抜きの予定路線として、米子から伸びてくる路線に接続するように描かれており、更に、西向きでは、新見に向かって別の予定路線が存在している。この二つの予定路線の存在は、現在では不思議な感じがするだろう。

一方、津山から鳥取に向かう因美線の路線では、鳥取から智頭までが既に開通しているが、津山－智頭間は、まだ予定路線があるのみである。

この地図では、省線と地方鉄道線が赤色と青色で区別されている。省線というのは、国の鉄道省所管を意味しており、地方鉄道線は会社線、すなわち私鉄である。





◆ 「日本全国交通図」

(昭和4年1月1日、牧一雄家資料、地図-8、当館蔵)

比較的地図らしい形の鉄道地図である。ここになると、津山駅が津山口駅に替わって主要駅として描かれている。しかし、よく見ると、津山口-津山間は太く描かれており、この区間が作備線であることを表現している。

西に延びる作備線については、津山口から中国勝山までの営業は変わっていないが、その先に変化が見られる。中国勝山から直接米子に向かっていた予定路線が消え、中国勝山から新見へ伯備線に接続するように描かれている。

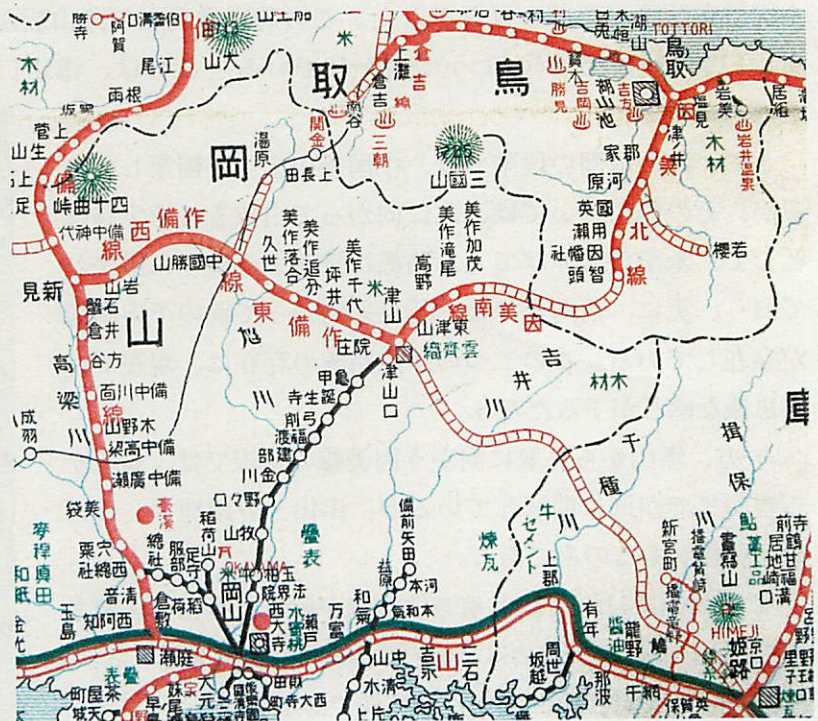
鳥取に向かう因美線では、津山-美作加茂間が、昭和3年3月15日に開通している。

しかし、智頭までは繋がっていないため、次の地図にあるように、因美南線と因美北線と呼ばれた。姫路-津山間を結ぶ路線は、以前から計画されていたが、この地図に至って姫津線予定路線として登場している。ただ、ここに描かれている予定路線は、実際には大きく変わることになる。

◆ 「大日本鉄道地図」 (昭和5年1月1日、牧一雄家資料、地図-6、当館蔵)

昭和4年4月14日に新見-岩山間が開通し、作備西線と呼ばれたため、津山口-中国勝山間は作備東線と呼ばれている。この地図の時点では、中国勝山と岩山の間は、色が付けられているが、まだ開通はしていない。そして、中国勝山から湯原への予定線が加えられている。

従来は、鉄道路線の他には、地名と温泉くらいの情報しかなかったが、この地図では、地域の特産品が記載されている。津山では、米と雲斎織が見られる。



◆ 「全日本最新名勝名物地図」

(昭和7年9月5日、移管資料20090708-55、当館蔵)

昭和5年12月11日、中国勝山-岩山間が繋がり、津山口から新見までが開通して、全線を通して作備線と呼ばれた。

また、昭和7年7月1日、美作加茂-智頭間が繋がり、津山と鳥取の間が全線開通した。そのため路線名も因美線に統合された。

この時点で、姫路から美作国に向かう姫津線の路線では、新たに播磨新宮までが開通していた。そして、一方で中国勝山から湯原への予定線は消えている。この路線は、この後再び現れることはなかった。

地図の情報としては、この地図には有名な社寺が多数記載されている。また、観光地も比較的多く載せられるようになってきた。津山の名物としては、初雪と雲斎織が載せられている。



◆ 「交通遊覧案内地図」

(昭和9年7月5日、移管資料20090708-42、当館蔵)

地図の上だけで見れば、姫路からの姫津線の路線が順調に伸びてきて、三日月まで達している。この頃、地図では予定線の表示のみであるが、東津山からも敷設工事に着工しており、江見に向かって着々と工事は進んでいた。



◆ 「日本案内記中四国編」 (昭和10年12月28日、本沢信美家資料-367、当館蔵)

これは、鉄道地図ではなく、鉄道省が発行した観光案内を目的とした冊子に添えられた地図である。昭和9年11月7日、東津山から江見までの区間が開通した。この結果、東津山-美作江見間を姫津西線とし、姫路から伸びていた姫津線が姫津東線となった。

いよいよ、津山-姫路間全線開通が近づいていた。この地図では、江見-佐用間が予定区間となっているが、その後も、両方からの工事は続き、そして、昭和11年4月7日、江見-上月間が接続され、東津山と姫路を結ぶ姫津線が全線開通した。その結果、津山を經由して姫路から新見までが繋がったため、姫津線と作備線、因美線(東津山-津山)を統合した上で、津山-津山口間を支線とする姫新線が誕生した。

この後、津山口と岡山を結ぶ中国鉄道は、昭和19年6月1日を以て国有鉄道となり、津山-津山口間を含めて津山-岡山間の路線となると、路線名も津山線と改められ、現在に至る鉄道網が完成した。



博物館入館案内

- 開館時間 午前9:00~午後5:00
- 休館日 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日~1月4日・その他
- 入館料 一般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料
※ () は30人以上の団体

大 博物館だより No.63 平成21年10月1日

編集・発行: 津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ㊟(0868)23-9874
E-mail: tsu-haku@tvtn.jp

印刷: 有限会社弘文社